

平成22年度 【 学園研究費助成金 】 研究成果報告書

学部名 看護学部

フリガナ ウサミ ヒサエ
氏名 宇佐美 久枝

研究期間 平成22年度

研究課題名 看護師が患者に用いているユーモアに関する研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	宇佐美久枝	看護学部	准教授
研究分担者	星野純子	看護学部	講師
研究分担者	中神友子 濱本律子	看護学部	助手

1. 本研究開始の背景や目的

ドイツにおけるユーモアは「にもかかわらず笑うこと」と定義されている。近年、このユーモアの効用に関する研究は進み身体的効果、心理的効果が明らかになりつつある。

臨床の場でも多くの看護師が患者にユーモアを用いることは価値や効果があると認識している事が報告されている。しかし看護師が患者に用いているユーモアはどのようなものなのかを明らかにした研究は見当たらない。さらに、看護師が患者に用いているユーモアに影響を与える看護師の背景、患者の背景について明らかにした研究も見当たらない。

本研究は看護師が患者に用いているユーモアはどのようなものかを因子探索研究から明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法等

対象者：対象者のユーモアの定義を一定にするため、研究者の実施するユーモアに関する講演に参加した者で、慢性期にある成人（20歳以上の者をいう）のケアをしている、病院に勤務する者。そして本研究について承諾が得られた看護師30名程度。

データの収集：研究協力者の看護師が、患者にユーモアを用いたと判断した際「ユーモア記述用紙」を記入する。その期間は2週間である。2週間後「ユーモア記述用紙」を参考に研究者は研究協力者と約30～60分程度の半構成的面接を行う。

データの分析：「ユーモア記述用紙」に書かれていることと、半構成的面接で語られたことを逐語化し、対象者の背景、患者の背景、患者にユーモアを用いた意図、内容、状況などについてカテゴリーを生成し、カテゴリー間の相互関連を検討する。

3. 研究成果の概要

ユーモアが看護に必要なことを知ってもらうこと、そして研究協力者の募集をかねて、名古屋第一赤十字病院で講演を行った。ユーモアに興味を持つ人、またそういえば日ごろ何げなく使っていたかもという人もいた。その中から研究協力者になって、収集したユーモアを分析した結論は以下のとおりである。

看護師は患者の思いに共感、あるいは肯定的に物事を捉えられるようにかかわろうとしている。それを実現するためにユーモアは有効であると考えている事がわかった。「ここでもうちょっと気の利いた一言が言えたら患者を和ませることができるのに」または「意識してユーモアを使おうとしたことで患者のとのかかわりを考えるきっかけになった。」という意見があった。

ユーモアを使う時に気をつけたことは、患者に不快な思いをさせないようなユーモアを用いることであった。入院期間が短い患者とはユーモアを使う回数が少なかった。それは人間関係ができていない中でユーモアを使うことは難しいという意見があった。しかし、日常のケアでよくユーモアを使っていると思っている人は、ユーモアをきっかけにして人間関係を確立していく人がいることがわかった。

今後、事例収集を重ね、カテゴリーを生成し、カテゴリー間の相互関係を検討する。

4. キーワード

①ユーモア	②看護技術	③慢性期	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

今後、研究を継続していき看護科学学会、紀要等で投稿を予定している。事例が多く確保できれば、事例集の出版も考えている。